

ひとはく研究員、ヒアリを迎え撃つ

今年5月に、環境省から、ひとはくでアリの研究をしている私のところに、神戸市の港に陸揚げされた中国のコンテナに潜んでいたアリが同定のために送られてきました。そのアリこそ日本で初めて侵入が確認されたヒアリでした。

ヒアリは、もともと南米原産のアリです。それが物流で運ばれて1930年代に米国に侵入、その後、経済活動がグローバル化する中で中国、台湾、オーストラリア、ニュージーランドと分布を広げ、今、世界中が最も恐れている外来種になっています(写真1)。ヒアリが恐れられているのは、強力な毒針を持っているだけでなく、働きアリの数が40万匹に達することもある大きな巣を作り、巣を踏んだ牛が襲われたり、配電盤などに巣を作って停電を起こしたりと、侵入地で農業や商業活動に甚大な被害を及ぼしているからです。このため、日本でも国内侵入前から、環境省が「特定外来生物」に指定し、その侵入を警戒していました。

5月以降も、ヒアリの侵入は国内各地で毎週のように続き、11月9日時点で、その発見は12都府県、30回以上に及んでいます(図1)。ヒアリが発見されるたびに、その標本が同定確認のために環境省から私のところに送付されてきました。環境省や自治体、マスコミなどが、その結果を緊迫した状況で待っているヒアリ同定作業は、それこそ休みなしの仕事になりました。

また、マスコミが「殺人アリ」の呼び名とともに、その刺症被害を大きく取り上げたことで、



写真1 ポテトチップに群がるヒアリ(台湾で撮影)ヒアリが定着して10年の台湾では刺傷被害による死者は0人ということでした

パニック的な状況が起こり、その問い合わせも殺到しました。時には、両手に受話器を持って、同時に2件の問い合わせに答えるということもありました。テレビや新聞の取材も優に60件以上を超え、それら全てに対応して、「ヒアリを正しく知って、正しく怖がる」ことの重要性を訴えました。さらに、博物館の利点を生かし、ヒアリの実物標本や拡大模型、その解説パネルを展示した「ヒアリ緊急速報展」を国内で先駆けて制作し、ヒアリ・パニックの鎮静化にも取り組みました(写真2)。

このヒアリ発見は国際貿易が盛んな兵庫県が、改めて外来生物の侵入リスクが高く、我が国の外来種問題の最前線に立たされていることを行政に再認識してもらうことにもなりました。神戸市では、ヒアリの侵入・定着を阻止するために、国や他の地方自治体に先駆けて、最新の知見を取り入れた対策を施策に盛り込もうと、有識者会議を設置。私も委員に招聘され、ヒアリの侵入を初期段階で叩くための監視方法などについて提言をおこないました。その後、ヒアリの国内侵入地が拡大するにつれて、岡山県や広島市、さらには環境省や国土交通省などからも提言を求められるようになり、また、各地の自治体からヒアリの研修会の講師依頼も多数寄せられるようになりました。それらに答えるために、各地を忙しく飛び回ることはなりましたが、「思索し行動し提言する博物館」の研究員として、これまでの研究活動を地域の自然や暮らしを守るために役立てるという責務を果たせたのではないかと考えています。



図1 日本国内のヒアリ発見地点(11月9日時点)

今年のヒアリ侵入は、ヒアリとの果てしない戦いの序章にすぎません。中国との貿易が続く限り、ヒアリの侵入は今後も続くでしょうし、中国と貿易しているアジアのほかの国にもこのアリは広がっていくと考えられます。私のヒアリとの戦いも、ますます忙しくなることでしょう。その戦いの中で、「最初にヒアリが見つかったのが、兵庫県で良かった」という言葉をいただくことがあります。これは、兵庫県に人と自然の博物館があり、アリの研究者がいて、ヒアリの標本を始め多くの昆虫標本が収蔵されていたことが、国内初のヒアリ侵入を素早く的確に迎え撃つことにつながったというお褒めの言葉です。侵入が危惧されている外来種はヒアリだけではありません。経済活動がますますグローバル化する中で、外来種との戦い

の拠点となる自然史博物館や研究員の存在が、今後、ますます重要になることは間違いありません。
橋本佳明(自然・環境評価研究部)



写真2 ひとはくでのヒアリ緊急速報展

ヒアリ対策：最も基礎的なことが最も役に立つ

今年最大のトピックスは、神戸・尼崎でのヒアリ侵入でしょう。当館ではいち早くホームページを立ち上げて学術的に正確な情報を発信しました。詳細な写真や見分け方、対策まで網羅的に情報を掲載し、実に1月で7万アクセスにも及びました。地味ですが博物館らしい対策も展開しています。これまで築いてきた博物館ネットワークを活かし、同定用標本や資料の配布、同定ができる人材リストの行政機関へ提供、さらにメーリングリストを立ち上げて情報共有体制を構築、専門家の知を結集してレポートを作成し、日本生態学会として国に対して提言書を送付しました。
(<http://www.esj.ne.jp/esj/Activity/2017Hiari.html>)

その後、この提言は2つの成果を発揮しています。1つ目は、国の方針である「ベイト剤(毒薬)を全国の港湾に一度きり大量に撒いてモニタリングしない方式(お金と手間はかからないが、在来アリが全滅)」を批判し、代替案として学術的裏付けのある「誘引餌による簡易モニタリング後、発見箇所のみベイト剤を使用する方式(手間だけ現状把握できる、在来アリを天敵利用)」を提案。国の英断もあって方針が変更されました。

この結果は重要で、モニタリングから、少なくとも神戸では3回以上別々のコンテナで運ばれて侵入していることが判明しましたが、従来の方法ではヒアリの侵入を許していた可能性があります。2つ目は、ヒアリはコンテナ床下の隙間に営巣していることを予想した点です。実際に、大井埠頭で床を解体したところその通りでした(写真)。コンテナ床下が「飼育装置」になっていることは、これまで誰も気づいていませんでした。この発見は、世界中のヒアリ対策について重要な知見を与えるものです。適切な環境対策や地域づくりをすすめるためには、基礎研究が不可欠であることを再認識させられました。
三橋弘宗(自然・環境マネジメント研究部)



東京港におけるコンテナ床下を剥がしてのヒアリ調査の様子(環境省提供)